福岡城跡

─ 潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告 ─

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第969集

2007

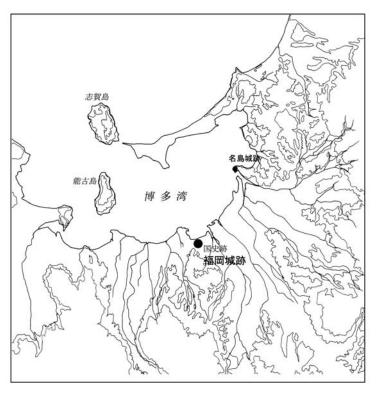
福岡市教育委員会

国 史 跡

福岡城跡

──潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告 ─

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第969集



9146 Fue - 18

9363 Fue - 25

9671 Fue - 38

2007

福岡市教育委員会



1. 国史跡福岡城跡全景 (南から)



2. 時櫓跡全景(南から)



3. 時櫓跡礎石列(東から)



4. 潮見櫓跡全景(北西から)



5. 櫓台全景(東から)

福岡城は、福岡藩初代藩主黒田長政が、慶長6 (1601) 年から7カ年を要して築城した城郭です。また、荒津から長浜にかけて新たに埋め立てて作った城下町を中心として、西は室見川から、東は那珂川までの範囲を取りこみ、広大な領域を有する惣構えでした。中世以来の自治都市である博多とは、那珂川を挟んで対峙し、江戸時代の長い歴史を織り込みながら近代を迎えますが、本市の都市形成や文化の醸成に深い影響を与えていることは否めません。

そういった意味で、福岡城は本市の代表的な歴史的遺産の一つであり、将来に向けて保存・整備し、 正しい歴史認識を育むための適切な活用が必要であります。

本市においてはこの観点から、昭和62 (1987) 年末の鴻臚館跡の発見を契機に策定された「舞鶴城 址将来構想 (中間とりまとめ)」に則りながら、都市整備局が所管する「舞鶴公園」整備にともなう 確認調査や、現存する城郭遺構である県指定建造物「崇福寺仏殿・拝殿」(潮見櫓・花見櫓) の購入 や部材調査などを進めてきました。

本報告書は、本丸の公園整備に伴う「時櫓」跡と、国立福岡病院移転に伴い事前に行った三の丸潮 見櫓跡の確認調査報告であり、いずれも、今後の復元整備にとって重要な調査成果が得られました。 本報告書が福岡城跡をはじめとして、本市の文化財保護に対するご理解とご認識の一助となれば幸い です。

最後になりましたが、調査から本報告書作成までの間、関係各位には多くのご協力とご理解をいた だきました。記して深甚なる感謝の念を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会教育長 植 木 とみ子

例 言

- 1. 本書は、国庫補助を受けて、平成3年度に実施した 国史跡福岡城跡本丸時櫓跡確認調査、平成5年度お よび8年度に実施した三の丸潮見櫓跡確認調査の報 告書である。
- 2. 本書で用いた地図は、図4が国土地理院発行の5万分の1地形図「福岡」、図5が福岡市都市計画図NO60・61・71・72である。
- 3. 本書での方位は平面直角座標系第 座標系 (日本測地系)によっており、磁北は真北方位から 6 98 西に偏する。なお、座標値は各調査年度当時のままであり、特に補正は行っていない。
- 4. 本書の第2章については、瀧本正志が中間千衣子の協力を受け執筆・編集した。なお、本章の遺構遺物の撮影および遺構の実測は梅崎元、島津明男、中野正徳、大橋善平、瀧本、遺物の実測は瀧本、トレースは中間、瀧本がおこなった。

その他の第1章および第3章については田中壽夫が 執筆・編集し、全体を総括した。

5. 発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

遺跡名	調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
福岡城跡	18次	9146	FUE-18	福岡市中央区城内1	278m²	1992,3, 1 ~ 1992,3,31
福岡城跡	25次	9363	FUE-25	福岡市中央区城内18-2	65 m²	1994,3, 1 ~ 1994,3,28
福岡城跡	38次	9671	FUE-38	福岡市中央区城内18-2	300 m²	1997,2,20 ~ 1997,3,18

本 文 目 次

Э	帛 草 序説				
	1. 調査に至る経緯			1	
	2. 調査の組織			1	
	3. 福岡城跡の概要			2	
	4.福岡城跡のこれまでの調査			2	
Э	第 章 時櫓跡の調査			7	
	1. 調査の概要			7	
	2. 遺構と遺物			7	
	3.小結				
Э	序 章 潮見櫓跡の調査			27	
	1. 調査の概要			27	
	2.遺構と遺物				
	3.小結				
	4 - 0	<i>1</i> 100		\ -	
	挿	义	Ħ	次	
図 1	時櫓跡調査作業風景	1	図20	北面石垣最上段・裏込め石(西から)	13
図 2	潮見櫓跡調査風景 1	1	図21	東面石垣最上段・裏込め石(南から)	13
図 3	潮見櫓跡調査風景 2	1	図22	時櫓跡中央部調査前(南から)	14
図 4	国史跡福岡城跡の位置(1/50000)	2	図23	時櫓跡検出状況(南から)	14
図 5	福岡城跡関係調査地点位置図(1/6000)	3	図24	時櫓跡北半部検出状況(南から)	14
図 6	福岡御城下絵図	5	図25	時櫓跡南側柱礎石列検出状況(西から)	14
図 7	福岡御城下絵図中の時櫓	6	図26	南側柱礎石列検出状況(西から)	14
図 8	福岡御城下絵図中の潮見櫓	6	図27	礎石列検出状況(北から)	14
図 9	崇福寺境内にあった頃の潮見櫓、花見櫓	6	図28	礎石根固め石検出状況(南から)	14
図10	時櫓位置図	7	図29	石垣南東隅部裏込め状況(南から)	14
図11	時櫓跡遺構配置図(1/125)	10	図30	南辺部調査前(東から)	15
図12	石垣横断面図(1/125)	10	図31	南辺部検出状況(東から)	15
図13	石垣横断面図(1/125)	11	図32	階段部検出状況(北から)	15
図14	石垣縦断面図(1/125)	11	図33	階段部検出状況(東から)	15
図15	石垣土層図(1/80)	11	図34	階段部検出状況(西から)	15
図16	時櫓跡全景(北から)	12	図35	階段部検出状況(東から)	15
図17	時櫓跡全景(東から)	12	図36	櫓跡出土福建産陶磁器(1/3)	16
図18	時櫓跡全景(西から)	13	図37	櫓跡出土唐津系陶器(1/3)	16

図19 西面石垣最上段・裏込め石(南から) 13 図38 櫓跡出土内ヶ磯窯系陶器(1/3)

16

図39	櫓跡出土白旗山窯系陶器(1/3)	16	図63	西面石垣検出状況(北から)	31
図40	櫓跡出土陶磁器 1	17	図64	北西角部石垣構築状況(北西から)	31
図41	櫓跡出土小石原・中野上の原窯系陶器(1/3)	18	図65	入角南面石垣検出状況(南から)	31
図42	櫓跡出土小石原窯系陶器(1/3)	18	図66	入角東面石垣検出状況(東から)	31
図43	櫓跡出土肥前系陶器(1/3)	18	図67	西面石垣検出状況(南から)	32
図44	櫓跡出土肥前系磁器(1/3)	18	図68	西面石垣南端部検出状況(南から)	32
図45	櫓跡出土土師器(1/3)	18	図69	西面石垣南端部検出状況(西から)	32
図46	櫓跡出土陶磁器 2	19	図70	北面石垣検出状況(東から)	32
図47	櫓跡出土陶磁器 3	20	図71	北面石垣東端部検出状況(東から)	32
図48	櫓跡出土軒瓦印判拓影	21	図72	北面石垣東端部検出状況(北から)	32
図49	櫓跡出土軒丸瓦拓影	22	図73	櫓跡中央部礎石遺存状況(9トレンチ 東から)	33
図50	櫓跡出土軒丸瓦1	23	図74	櫓跡中央部礎石遺存状況(9トレンチ 南から)	33
図51	櫓跡出土軒平瓦拓影	24	図75	櫓跡中央部礎石遺存状況(東から)	33
図52	櫓跡出土軒丸瓦 1·軒平瓦·鬼瓦·鯱	25	図76	櫓跡遺構平面図(1/200)	34
図53	潮見櫓跡現状(北東から 平成5年当時)	27	図77	礎石遺存状況(近接 東から)	34
図54	西面石垣検出状況(西から)	27	図78	礎石及び礎石据置き穴平面・断面図(1/100)	35
図55	潮見櫓跡の位置とその周辺(1/4000)	27	図79	県指定「崇福寺仏殿」現状平面実測図	36
図56	櫓跡全景(南東から)	28	図80	潮見櫓平面略図	36
図57	潮見櫓跡地形および遺構平面図(1/250)	28	図81	遺物実測図(軒丸瓦 1/5)	37
図58	櫓跡中央部全景(南から)	29	図82	遺物実測図(軒丸瓦 1/5)	38
図59	西面石垣裏込め状況(東から)	29	図83	遺物実測図(軒平瓦 1/5)	39
図60	櫓跡土層断面図(1/125)	29	図84	遺物実測図(丸瓦・平瓦 1/5)	40
図61	各面石垣立面図(1/80)	30	図85	遺物実測図(道具瓦・鬼瓦 1/5)	41
図62	北面石垣検出状況(北西から)	31	図86	瓦に押印された印判拓影(1/2)	42

表目次

表 1. 国史跡福岡城跡調査一覧

第 章 序説

1. 調査に至る経緯

(1) 時櫓跡

時櫓は、福岡城本丸北辺にあって、福岡城下を眼下に一望するには最も適した場所である。この時 櫓跡の前面植栽と墜落防止の柵の補修工事が計画され、工事の是非及び手法について協議が行われた。 本丸部分については、これまで調査実績がないために、当該地点の城郭遺構の遺存状況について十分 把握されていなかった。したがって、工事に伴って生じる地下遺構への保存上の影響などについて判 断が難しいかったこともあり、これに先立って、当該櫓の遺構の遺存状況を確認し、あわせて遺構の 保全策を構じ、今後の整備に質することを目的として平成3年度内に調査を行うこととした。

(2) 潮見櫓跡

平成3年度末に、本市は崇福寺から県指定崇福寺「仏殿」を購入した。解体に先立ち部材調査を行ったところ潮見櫓銘を持つ棟札の発見などによって、仏殿が「潮見櫓」、拝殿が「花見櫓」の可能性が高いと考えられるにいたった。

一方、潮見櫓跡は、三の丸北西角部に位置する。当該地は、旧厚生省が所管する旧国立福岡病院の 敷地内に所在し、長らく職員用駐車場や、ゴミ廃棄・焼却場として利用されていたが、平成9年度を 目途とした国立病院移転計画が浮上した。当該地点の遺構の遺存状況を確認し、跡地利用計画策定に 資することを目的として平成5年度に石垣の遺存状況の確認調査を、また、平成7年度から着手した 潮見・花見櫓の移築復元整備事業の一環として、櫓跡の礎石などの遺構確認調査を平成8年度に実施 することとなった。調査は以下の体制で行うこととした。

2. 調査の組織

【平成3年度 調査期間 平成4年3月1日~3月31日】

 調査主体 福岡市教育委員会 教育長
 井口雄哉

 調査総括
 文化財部長
 川崎賢治

 調査担当
 副主幹
 折尾 学

 主 査
 山崎純男

 文化財主事
 瀧本正志

【平成5年度 調査期間 平成6年3月1日~3月28日】

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉調査総括 文化財部長 花田兎ー

文化財整備課長 後藤 直

調査担当 主査 田中壽夫

文化財主事 瀧本正志

【平成8年度 調査期間 平成9年2月20日~3月18日】

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛調査総括 文化財部長 後藤 直

文化財整備課長 古西憲輔

調査担当 主 査 田中壽夫



図1 時櫓跡調査作業風景



図2 潮見櫓跡調査風景1



図3 潮見櫓跡調査風景2

3. 福岡城跡の概要

福岡城は、福岡藩初代藩主黒田長政によって、慶長6 (1601) 年から7年をかけて築城された平山城である。赤坂山から博多湾に向かって北へ延びたいくつかの尾根や、その間の小さな谷を埋め立てて平坦面を造成し、本丸を中心として東西に長く展開する独特の城構えとなっている。惣構えとしては、西は室見川から、東は那珂川までの範囲を取りこんだ広大な領域を有しており、そのうち城郭部分と内堀を一部含んだ約48ha が国史跡として指定されている (昭和32年8月29日、昭和57年10月14日追加)。

外郭の南側は、丘陵尾根を大きく切断し堀を設け、北側は遠浅の潟を埋め立てて、荒津から長浜にかかる一帯に城下町を作った。西側は大きく湾入した草ヶ江の入り江を大堀とする一方、東部には肥前堀、中堀を掘削し、中州・那珂川を挟んで、中世以来の商業自治都市である博多と対峙していた。

城内は、天守台、本丸、二の丸、三の丸の4層の郭で構成され、時櫓や潮見櫓をはじめとする47ほどの櫓が要所を固めていたといわれている。

現存する城郭遺構は、 各郭に残る石垣、門跡、階段の他、国指定重要文化財の南丸多聞櫓をはじめとして、県指定の潮見櫓、崇福寺仏殿 (潮見櫓・花見櫓)、山門 (本丸表御門)、祈念櫓、大手門 (下の橋) がある。

4. 福岡城跡のこれまでの調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成17年度までに53地点について調査が実施されている。そのうち、福岡城跡の調査として実施されたのは、30地点、鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは23地点である。表1にその内訳を示した。文献番号は5頁の参考文献一覧に対応する。

城内における調査のうち櫓跡に関しては、祈念櫓 (福岡城跡第6次)、月見櫓 (同第16次)、時櫓 (同第18次)、花見櫓 (同第21次)、潮見櫓 (同第25・38次) があげられ、礎石の配列や、階段などの付属施設、石垣などの遺構がそれぞれ確認されている。

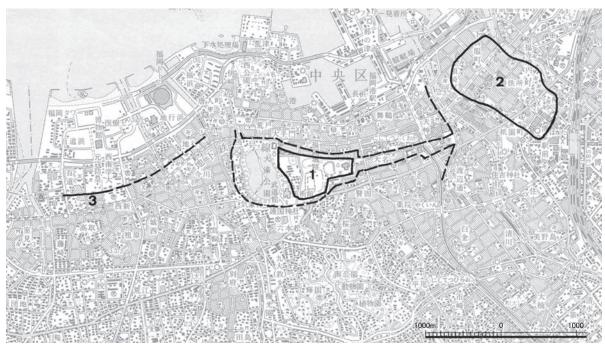


図4 国史跡福岡城跡の位置(1/50000)

1:福岡城跡 2:博多遺跡群 3:元寇防塁(西新~地行地区)

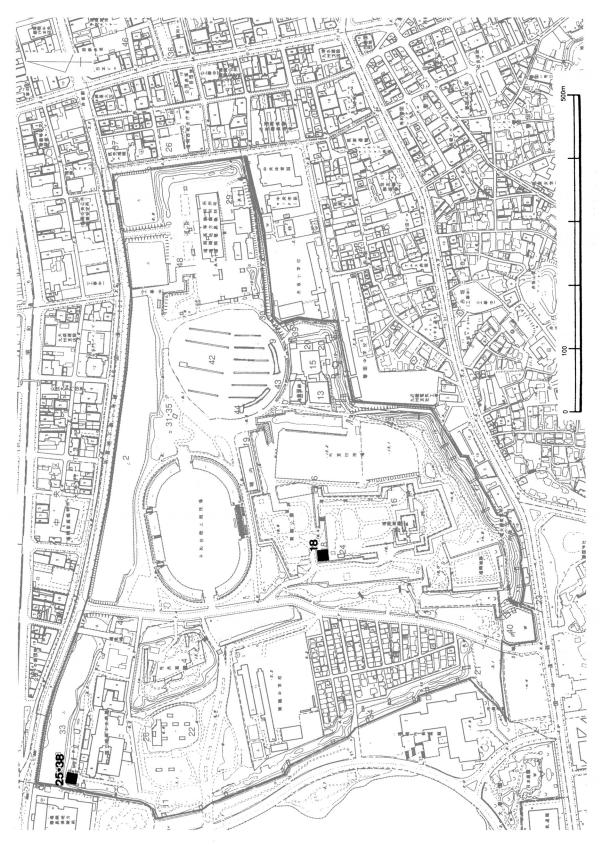


表 1. 国史跡福岡城跡調査一覧 (平成18年3月末現在)

表门	. 国	史跡福岡城跡調査-	-覧(平成18年	F3月ァ	ト現仕)			
次		地 区	調査原因	面積	調査期間	地区別次数		備考
А		平和台野球場南側 日大音家屋敷地	テニスコート 新設		5108(3日間)	鴻臚館跡1次	4,7,12	九州文化総合研究所 史跡域内(屋敷地内)
В	Ξ	三ノ丸西北郭	国立中央病院 建設		590626 ~ 590702 631007 ~ 631105		4	史跡域内(屋敷地内) 福岡県教育委員会
1	6301	三ノ丸東郭	裁判所建設	596	640327 ~ 640331	鴻臚館跡 2 次	2,3	史跡域内(屋敷地内)
2	7605	城北内堀外壁石垣	地下鉄建設	4,900	761201 ~ 771008		7	史跡域外(石垣)
3	7728	薬院新川石垣	地下鉄建設	500	780301 ~ 780630		7	史跡域外(石垣)
4	7948	御鷹屋敷跡	公園整備	2,200	790719 ~ 790811		5,9,10	史跡域内(屋敷地)
5	8134	赤坂門北部外壁	ビル建設	70	820317 ~ 820326		7	史跡域外(石垣)
6	8343	祈念櫓跡	史跡整備	36	840201 ~ 840612			史跡域内(櫓跡)
7	8447	肥前堀	公園建設	580	840601 ~ 840612	肥前堀1次		史跡域外(数馬門跡)
8	8533	肥前堀	市庁舎建設	150	850700 ~ 850800	肥前堀2次	8	史跡域外(石垣)
9	8747	三ノ丸	球場改築	650	871225 ~ 880120	鴻臚館跡 3 次	12,21	史跡域内(屋敷地)
10	8829	三ノ丸	確認調査	856	880727 ~ 881210	鴻臚館跡 4 次	12,21	史跡域内(屋敷地)
11	8865	城西~南内堀内壁	城堀浄化	500	880727 ~ 881210		13	史跡域内(土塁石垣)
12	8840	肥前堀	ビル建設	650	881107 ~ 881126	肥前堀3次	15 ~ 1	史跡域外(石垣)
13	8910	三ノ丸	確認調査	1,200	890420 ~ 891207		21,23	史跡域内(屋敷地)
14	8950	肥前堀	庁舎建設	700	891011 ~ 891021	肥前堀4次	19	史跡域外(石垣)
15	9005	三ノ丸	確認調査	1,300	900409 ~ 910131	鴻臚館跡6次	21	史跡域内(屋敷地)
16	9065	月見櫓跡	確認調査	190	910301 ~ 910331		20	史跡域内(櫓跡)
17	9130	三ノ丸	確認調査	1,000	910501 ~ 920331	鴻臚館跡7次	23	史跡域内(屋敷地)
18	9146	時櫓跡	確認調査	278	920301~920331		(969集)	史跡域内(櫓跡)
19	9218	三ノ丸	確認調査	1,670	920615 ~ 921030	鴻臚館跡 8 次	25	史跡域内(屋敷地)
20	9236	三ノ丸	確認調査	430	920910 ~ 930331	鴻臚館跡 9 次	25	史跡域内(屋敷地)
21	9262	花見櫓跡	確認調査	200	930301 ~ 930331			史跡域内(櫓跡)
22	9326	三ノ丸西北部郭	確認調査	450	930816 ~ 940228	鴻臚館跡10次	27	史跡域内(屋敷地)
23	9345	外堀(多聞櫓下)	公園建設	221	931213 ~ 940315		26	史跡域外(石垣)
24	9353	本丸西部	環境整備	80	931211 ~ 931221			史跡域内(屋敷地)
25	9363	潮見櫓跡石垣	史跡整備	65	940301~940328		(969集)	史跡域内(櫓跡)
26	9416	赤坂門	変電所建設	430	940525 ~ 940806		(463集)	史跡域外(石垣・門跡)
27	9420	三ノ丸	展示館建設	50	940606 ~ 940731	鴻臚館跡11次	28	史跡域内(屋敷地)
28	9432	三ノ丸	確認調査	850	940801 ~ 950315	鴻臚館跡11次	28	史跡域内(屋敷地)
29	9451	三ノ丸東郭	裁判所改築	1024	941101 ~ 950228		(546集)	史跡域内(屋敷地)
30	9463	三ノ丸東部南土塁	確認調査	60	950201 ~ 950228	鴻臚館跡11次	28	史跡域内(土塁)
31	9537	三ノ丸	確認調査	300	951101 ~ 960329	鴻臚館跡12次	30	史跡域内(屋敷地/土塁)
32	9546	中堀	社屋建設	154	951211 ~ 960329		(498集)	史跡域外(堀外壁)
33	9561	三ノ丸西北郭土塁	確認調査	500	960301 ~ 960329			史跡域内(土塁)
34	9617	三ノ丸西南郭土塁	駐車場整備	32	960621 ~ 960702			史跡域内(土塁)
35	9620	三ノ丸中央郭	確認調査	450	960704 ~ 961204	鴻臚館跡13次	30	史跡域内
36	9630	肥前堀	共同住宅建築	46	960823 ~ 960823			史跡域外(堀外壁)
37	9639	赤坂門外壁	事務所建築	10	960912 ~ 960912			史跡域外(堀外壁)
38	9671	潮見櫓跡	確認調査	300	970220~970318		(969集)	史跡域内(櫓跡)
39	9736	三ノ丸中央郭	確認調査	204	970818 ~ 980131	鴻臚館跡14次	31	史跡域内
40	9751	追廻門南側内堀外壁	確認調査	135	971027 ~ 971107			史跡域内(堀外壁)
41	9807	平和台球場跡地	公園整備	230	980410 ~ 980416		32	史跡域内
42	9831	平和台球場跡地	確認調査	930	980922 ~ 990120	鴻臚館跡16次	32	史跡域内
43	9910	平和台球場跡地	確認調査	3,500	990422 ~ 000315		(695集)	
44	8000	平和台球場跡地	確認調査	1,750	000425 ~ 010316	鴻臚館跡18次	(733集)	史跡域内
45	0060	警固中脇土塁	公園整備	110	010105 ~ 010131			史跡外(土塁)
46	0064	肥前堀	社屋建設	160	010302 ~ 010330			史跡域外(堀外壁)
47	0109	平和台球場跡地	確認調査	2,000	010521 ~ 020329	鴻臚館跡19次	(745集)	
48	0129	下の橋/上の橋大手門	確認調査	378	011002 ~ 020329		(772集)	
49	0218	平和台球場跡地	確認調査	1,200	020513 ~ 030331		(783-838集)	
50	0309	平和台球場跡地	確認調査	2,425	030506 ~ 040331		(838-875集)	史跡域内
51	0415	平和台球場跡地	確認調査	2,110	040401 ~ 050331			史跡域内
52	0502	平和台球場跡地	確認調査	2,110	050404 ~ 060331	鴻臚館跡23次		史跡域内
53	0503	肥前堀	共同住宅建設	156	050404 ~ 050520			史跡域外(堀外壁)

太字は本報告書で報告するもの。(集)は本市埋蔵文化財調査報告書

【関連文献・報告書】

- (1) 小田富士雄 「福岡市福岡城跡採集遺物調査報告 1961
- (2) 福岡県教育委員会「史跡福岡城発掘調査概報」福岡県文化財調査報告書第31集 1964
- (3) 首藤次男「福岡高など裁判所地区の地質」福岡県文化財調査報告書第31集 1964
- (4) 高野弧鹿「平和台の考古史料」(一) 1972
- (5) 福岡市教育委員会「筑前国福岡城三の丸 御鷹屋敷」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1980
- (6) 福岡市教育委員会「史跡福岡城跡環境整備報告書」 1981
- (7) 福岡市教育委員会「福岡城址 内堀外壁石積の調査 」福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983
- (8) 福岡市教育委員会「福岡城肥前堀」福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集 1986
- (9) 福岡市教育委員会「筑前国福岡城三の丸 御鷹屋敷 図録編」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1990
- ⑪ 尾崎直人「御鷹屋敷跡から出土した茶陶関係の陶片について」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1990
- (11) 福岡市教育委員会「福岡市の近世社寺建築」1990
- 福岡市教育委員会「鴻臚館跡 1 発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 1991
- (13) 福岡市教育委員会「福岡城跡・ 内堀内壁の調査 」福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991
- (14) 三木隆行「福岡城関係資料年表稿」福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991
- (15) 福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第3次調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (16) 小林茂「絵図・地図からみた肥前堀」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (17) 下山正一「肥前堀周辺の表層および地下地質」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (18) 磯 望 肥前堀周辺の地形と調査地点の地形形成過程」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (19) 福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第4次調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集 1992
- 200 福岡市教育委員会「福岡城月見櫓」福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集 1992
- ② 福岡市教育委員会「鴻臚館跡 2 発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集 1992年
- ②② 小林茂・佐伯弘次「近世の福岡・博多市街絵図:公用図について」「歴史学・地理学年報』16号 1992
- 福岡市教育委員会「鴻臚館跡 3 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 1993年
- ② 福岡市教育委員会「福岡城の櫓」1994
- ② 福岡市教育委員会「鴻臚館跡4 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集 1994
- 20 福岡市教育委員会「福岡城跡第23次調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集 1995
- (27)福岡市教育委員会「鴻臚館跡 5 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第416集 1995
- ② 福岡市教育委員会「鴻臚館跡6 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第486集 1996
- ② 福岡市教育委員会「鴻臚館跡7 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第487集 1996
- ③ 福岡市教育委員会「鴻臚館跡 8 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第545集 1997
- ③ 福岡市教育委員会「鴻臚館跡9 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第586集 1998
- ③ 福岡市教育委員会「鴻臚館跡10 発掘調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第620集 1999

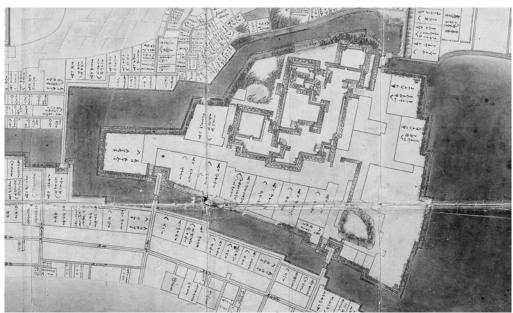


図 6 福岡御城下絵図

5. 時櫓について

時櫓は、本丸西北の角に建つ二層の櫓である。その名称は、「時打」、「時櫓」、「時計櫓」、「御時櫓」 などと絵図には記載されており、明治35 (1902) 年に描かれた「福岡衛戌略図」では西北角部は空白 であり、すでにこの頃には消失していたと考えられる。『福岡御城下絵図』などの絵図面類の記載状

況から、櫓は二重二階建てと推定される。紀念櫓と比較してやや規模が大きく描かれているものもあり、櫓跡の平面規模ならびに調査結果から見ると、東西梁行7間、南北桁行4間ほどの建物が想定でき、比較的規模の大きな櫓であったことが考えられる。

6. 潮見櫓について

潮見櫓は、『福岡御城下絵図』などでは、三の 丸北西角に建つ二重二階建の櫓で、東側と南側に 平屋の付櫓を有していたと考えられる。

この櫓は、久しく下の橋大手門南側に隣接して 建つ県指定「潮見櫓」そのものと考えられてきた。

一方、明治41年に崇福寺に仏殿、拝殿として払い下げられた櫓は、長く月見櫓と花見櫓と考えられてきたが、平成3年度に行った解体前の部材調査の結果棟札が確認され、仏殿が潮見櫓、拝殿が花見櫓の可能性が高くなったことと合わせ、先の「福岡衛戌略図」に月見櫓もまた、空白になっていることから、明治41年に払い下げられたのは潮見櫓であった可能性が高いことが指摘されるようになった。

さらに、崇福寺には、明治41年の払い下げ申請に関する草案が残っており、潮見・花見櫓が一緒に申請され、かつ両者の簡単な平面図と二棟の見積もり額と一致する領収書が残っていることから、現状では、ほぼ潮見・花見櫓で間違いないと考えられるにいたっている。

平成7年度~9年度にかけて、仏殿の解体後の部材調査、部材の遺存状況や平面規模、立体的な規模の復元を行った。潮見櫓の遺存状況は、花見櫓が非常に残りがよいのに対して、払い下げの際の改変が著しく、当時の部材は18本程度しか遺存していないといった所見が得られており、復元にあたっては、現指定の「潮見櫓」の原位置の問題も合わせて慎重な検討が必要であると思われる。

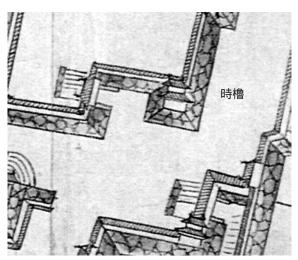


図7 福岡御城下絵図中の時櫓

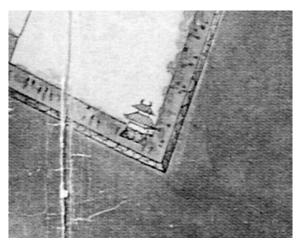


図8 福岡御城下絵図中の潮見櫓



図 9 崇福寺境内にあった頃の潮見櫓、花見櫓

第 章 時櫓跡の調査

1. 調査の概要

調査目的は福岡城整備における必要な情報を得ることにあった。しかし、福岡城跡全体に言えることであるが城絵図と現況地形から得られる情報は極めて限定されている。時櫓跡においても同様であることから発掘調査を実施することとなった。ただし、時櫓跡敷地の全体を調査対象として実施するものの、発掘調査は表土除去と礎石などの構造物の原位置を確保する事を前提として行った。このため、石垣の築造工法をはじめ、石垣の裏込め構造や基礎工法を解明するに至らなかった。

2. 遺構と遺物

遺構では櫓が立地する石垣の規模と構造の一部、さらには建物基礎を確認した。遺物はすべて表土中からによる出土で福岡城時代、明治時代以降に大別される。

(1)遺構

1)造成(図12~21)

時櫓跡が立地する石垣の張出しは、高さ6.3m、上面部で幅14.5m・奥行き18m、基礎部で幅17.8m・奥行き19.2mを測る。花崗岩の自然転石を粗割した石材を布積みして成形した法面は直線を呈する。角部は、柱状に加工した石材を算木積みする。石垣築造時における裏込めは、法面から2~3mの奥行きを持って行っていると考えられる。

櫓敷地の南辺の本丸敷地との境界は、小口石積みにより一段高くし間仕切りし、その比高差は1.5 mが推定される。大半の石積みは公園施設建設の際に壊されているものの、東に位置する塀の南側縁石ラインより北へ1.8m入り込む矩形を呈する。

造成は、地山の頁岩が敷地の中央近くまで露頭し、さらに北方向へ向かって下ることから、南から 北方向に伸びる旧地形の丘陵尾根筋を利用している事は明らかである。

2) 建物(図12~27)

調査地中央部において礎石が東西 方向に一直線に配置されており、当 初に配された礎石の上に根堅め石と 礎石を設ける新旧の状態が残る。礎 石列の間隔は、下段では98cm~100 cm、上段では90cmを測る。下段列の 標高は23.87m~24.04mを測り、総 じて中央へ向かって低くなる傾向が ある。上段列は二群に分かれ、一方 は24.08mと24.10m、他方は24.40m ~24.45mを測る。現状の石垣縁石 高は礎石列の延長線上に当たる西端 部で24.20m、東端部で24.27mを測り、下段列高よりかなり高い。礎石

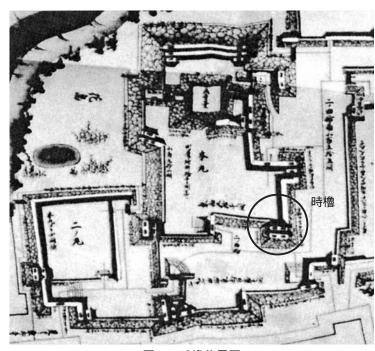


図10 時櫓位置図

の位置から想定される建物の規模は、東西棟の梁行き14m、桁行き8mである。礎石位置の関係から 櫓建物が少なくとも2回以上の建替がなされ、石垣も絡む大規模な改築が想定される。

3) 階段(図12・32~35)

調査地の南西隅部、闕所櫓と時櫓とが接する地点で割石を小口積みして築いた階段の一部を確認した。間口幅1.8m以上、踏み込み幅0.5m、1段高0.3mを測り、4~5段で構成していたと考えられる。この石段が闕所櫓と時櫓の共有的なものかは不明。

(2)遺物

出土した遺物は近世~近代の陶磁器類、瓦類、炭化米、獣骨、貝、銅銭である。陶磁器類は一部の 福建窯系や備前を除けば、唐津、黒田藩内の高取、肥前に集約され、機種が碗・皿・壷・水滴・火鉢・ 擂り鉢・摺下などの日常什器である。明治から敗戦まで軍事施設であったことを示す陶器も出土した。

1)福建窯系陶磁器 (図36・40)

72は器面全体に白色釉を厚く施し、内外面とも全面に貫入する陶器碗。外面は口縁部と底部に横線をそれぞれ描いた間に草花唐草文、内面は口縁部に横線と見込みに花文を配置する。それぞれ外形線を濃い藍色線で描き、内側を薄い藍色で塗る。78は磁器の碗で胎土は乳白色を呈し、器面内外面にやや灰色濁した透明釉がかかる。外面は全面に草花文、内面は見込みに花文が藍色で描かれている。16世紀後半~17世紀前半期のものと推定される。

2) 唐津系陶器 (図37・40)

44の碗は底部と体部との境に明瞭な段がつき、口縁部は直立する感がある。胎土は暗橙灰色を呈し、粗粒である。暗緑色の釉は、内面全面と外面上半部に施されているが、ガラス質の残存が少ないために光沢が無い。火事などによる被熱を受けている可能性がある。80の碗は青灰色の胎土に灰色釉を器面全面に厚く施している。50の碗は、精選された暗橙色を呈する胎土の器面全面に茶灰色釉を施し、白釉を部分的に施す。外面には鉄絵を施している。57の小碗は淡橙灰色を呈する胎土。僅かに緑色を帯びた灰色釉を内面は全面、外面は上半部に施している。高台を有しない底部は糸切り痕跡を残す平坦。58の小碗は僅かに緑色を帯びた淡青灰色釉を高台を除いた範囲に施している。小型の高台は直に立つ。胎土は淡青灰色を呈し、砂粒は粗い。41は大型の皿で胎土は粗く、暗茶褐色を呈する。内面には白色釉の刷毛目を施し、その上に緑色を帯びた灰色釉を施している。68は小型の皿で、淡黄白色を呈する胎土はやや祖粒である。黄白色の釉薬を看るが、被熱により剥落している可能性がある。

見込みには砂目跡を残す。17世紀前半期のものと推定される。

3) 内ヶ磯窯系陶器 (図38・40)

71の碗は口縁が直に立ち上がり、体部中央位は緩やかな絞りを呈する。胎土は橙褐色を呈し、粗粒である。高台内面には調整の渦痕跡が残る。器面は全体に貫入が認められ、釉はやや濁った白色を呈する。火事などによる被熱を受けている可能性が高い。45の碗は胎土が暗橙灰色を呈し、粗粒である。高台はヨコナデによる簡単な仕上げ。釉は内面と外面上半部にのみ施し、僅かに緑色を帯びた白色を呈する。被熱により剥落している可能性がある。53は底部から丸味を呈しながら立ち上がる。高台は僅かに立ち上がり、粗雑である。胎土は淡褐色を呈し粗粒である。釉は内面と外面上半部にのみ施し、

灰色を呈する。65は碗で淡褐灰色を呈し、粗粒である。釉は内面と外面上半部にのみ施し、緑灰色を呈する。52の皿の胎土は橙褐色を呈し、粗砂粒を含む。高台は丸味を呈し、低い。釉は白色呈し内面と外面上半部に施している。火事などによる被熱を受けている可能性がある。43は大型の皿で、胎土は茶褐色を呈する砂粒である。高台は糸切りにより切り離した底部面を削り出しにより成形している。釉は透明感のある灰色を呈し、口縁部の内外面に限って施している。このため露胎を呈する内面中央部には焼成時の重ね痕跡が残る。38は大型の皿の口縁部で、端部は直に立ち上がる。胎土は暗褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。藁灰釉を器面全面に施し、底部外面は掻き取り仕上げている。140は小型の皿で、破片時に熱を受けている。暗橙色の胎土は粗粒で、1mmほどの砂粒を多く含む特徴を有する。高台は極めて低く、僅かに削り出しにより成形される。42は大型の壷もしくは甕底部と考えられる。胎土は淡橙灰色を呈し粗砂粒である。器壁は厚く、1.3cmを測る。高台は削り出しにより成形され、端面にはV字状の切り込みが施されている。釉の榛原釉は白色を呈するが火事などによる被熱を受けている可能性がある。17世紀前半期と推定される。

4) 白旗山窯系陶器 (図39・40)

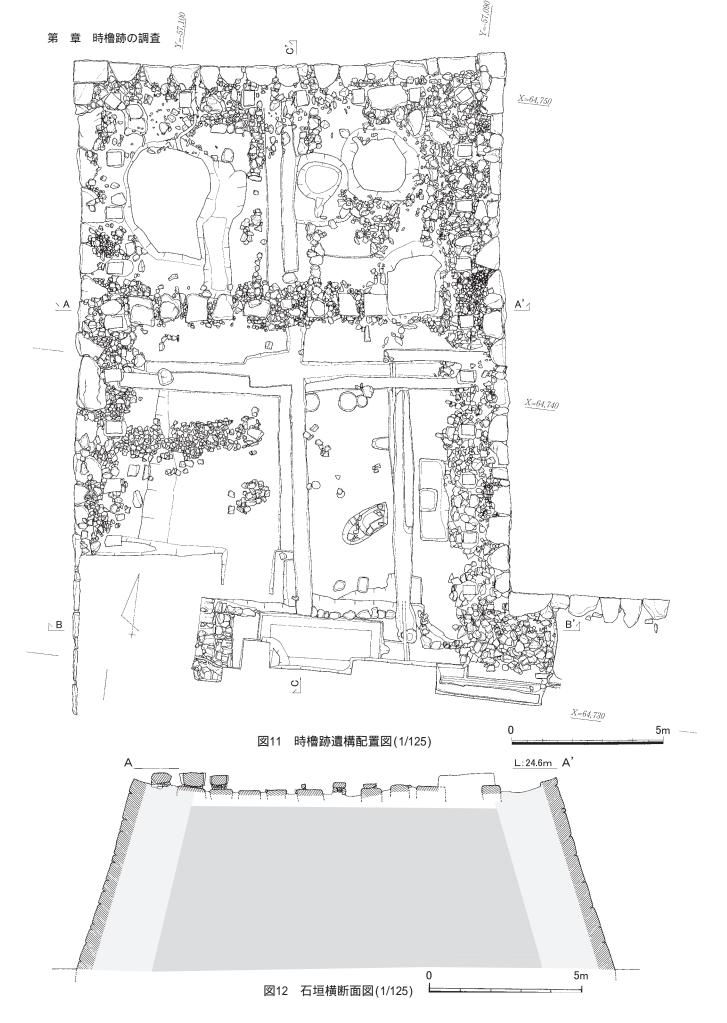
70の碗は火事などによる被熱のために器面に釉薬を残さない。底部は半球状を呈し、口縁は直立して端部はやや外反する。僅かに黄色を帯びた乳白色の胎土は粗粒である。釉は内面と外面上半部にのみ施した痕跡が看られるが、熱を受けて溶け落ちて明瞭には残さない。高台は削る出しにより成形。64は小型の碗と思われる。胎土は緻密で灰白色を呈する。小さな高台に丸味を呈する底部が付く。内面には海鼠釉が施され、外面には露胎の上に深青色の釉薬による文様が施されている。17世紀後半期と推定される。

5) 小石原・中野上の原窯系陶器 (図41・46)

99は碗で底部は丸味を呈する。胎土は淡青灰色を呈し、緻密である。僅かに緑色を帯びた透明感のある釉を器面全面に施し、高台端部のみ掻き取る。8は皿で、胎土は緻密で磁器的様相を呈する。口縁は弧を描きながら揺るやかに外反しながら立ち上がる。高台は小さく低い。淡緑灰色の釉を器面全面に施し、内面底の見込み部分だけ掻き取る。外面の輝きがかすれている部分が多いことから、被熱の可能性がある。100は皿で胎土は乳灰色を呈して緻密である。透明感のある淡い灰色を呈する釉を器面全面に施し、内面底の見込み部分だけ掻き取る。底面の見込み部分には焼成時に発生した重ね焼き痕跡を明瞭に残す。101は壷類の破片。淡黄灰色を呈する胎土は緻密。球状を呈する体部の底には削り高台が付く。器面外面全面に透明感のある灰色の釉を施し、高台端面の釉を削り取る。外面には細かい貫入が看られる。17世紀末~18世紀前半期と推定される。

6) 小石原窯系陶器 (図42・46)

47は碗で丸味のある底部を呈する。胎土は粗粒で淡黄灰色を呈する。釉は内面が淡黄灰色、外面が灰色を呈する。高台は削り出しで直立する。48は碗で、胎土は茶色を呈し粗粒である。釉は透明感があり、刷毛目による彩文が施されている。高台は先細で、削り出しによる。51は碗で高台がやや大きい。黄灰色を呈する釉は器面全面に施され、高台端面のみ削り取っている。62~63、54~56は鉄釉が器面全面に施された碗で、高台端面への施釉を削り取る。54と55の口縁部外面には部分的に藁灰釉を看る。63は胎土が黒灰色で、釉色も他より異なり、他の碗では見込みに釉溜りが有るのに認められない。17世紀末~18世紀前半と考えられる。



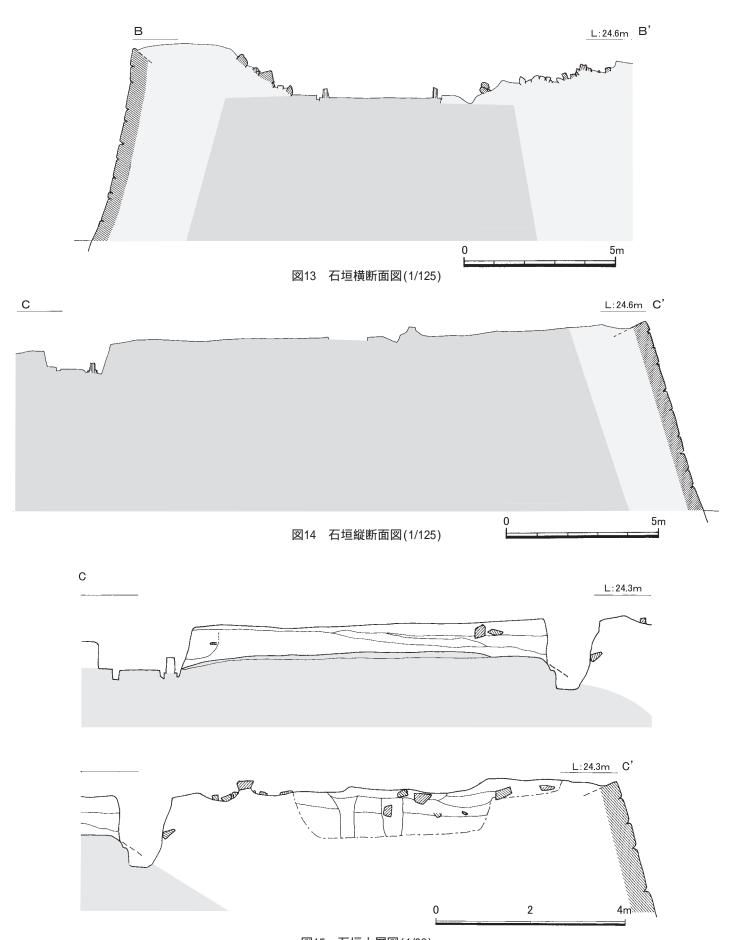


図15 石垣土層図(1/80)

第 章 時櫓跡の調査



図16 時櫓跡全景(北から)



図17 時櫓跡全景(東から)

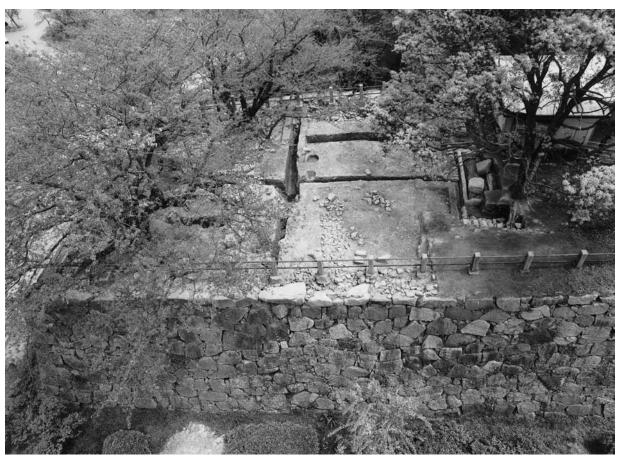


図18 時櫓跡全景(西から)



図19 西面石垣最上段・ 裏込め石(南から)



図20 北面石垣最上段・ 裏込め石(西から)



図21 東面石垣最上段・ 裏込め石(南から)

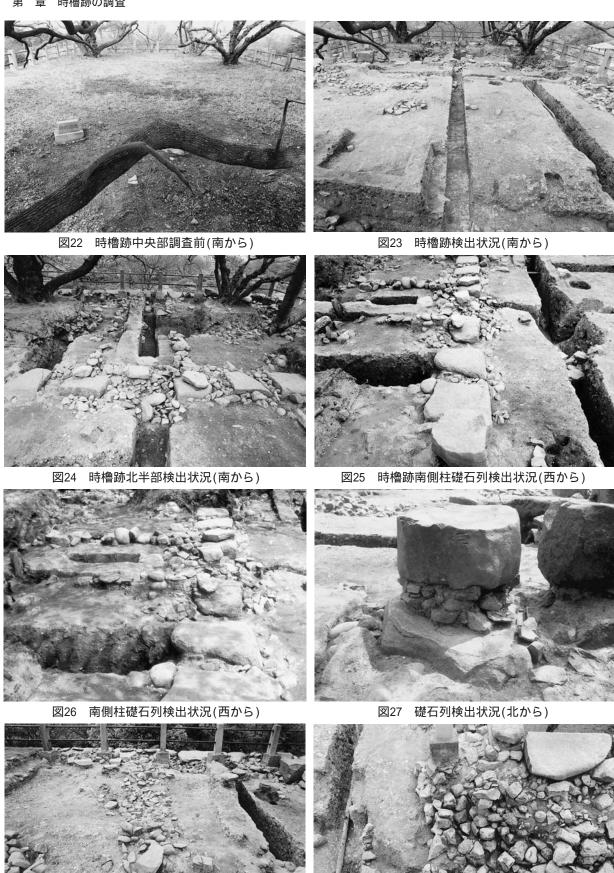
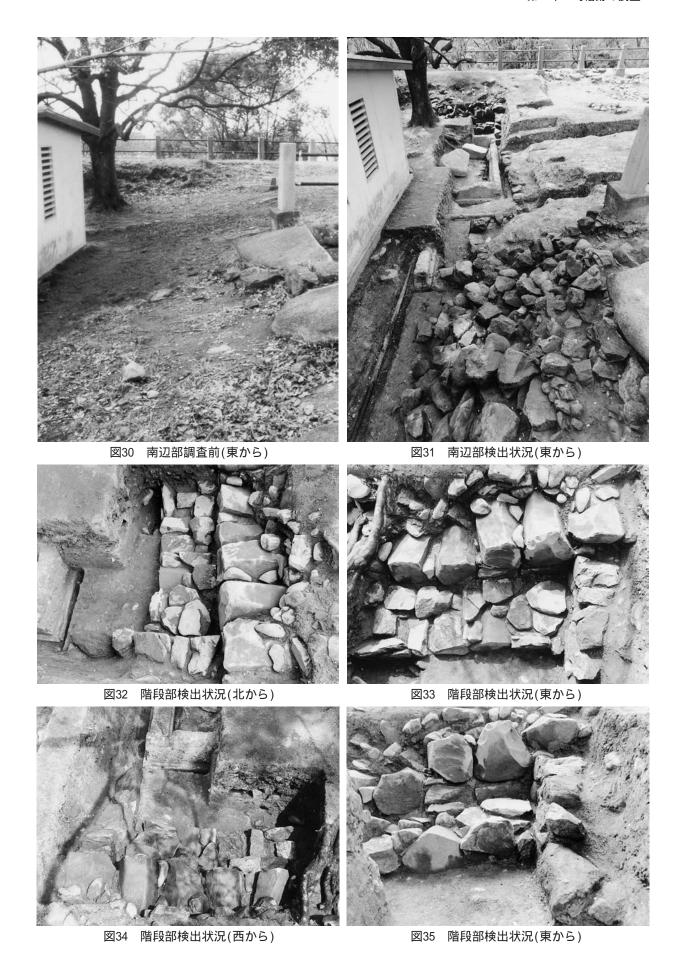


図28 礎石根固め石検出状況(南から)

図29 石垣南東隅裏込め状況(南から)



第 章 時櫓跡の調査

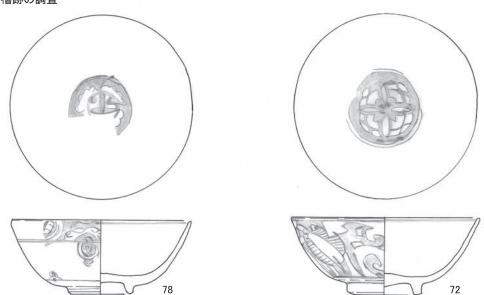
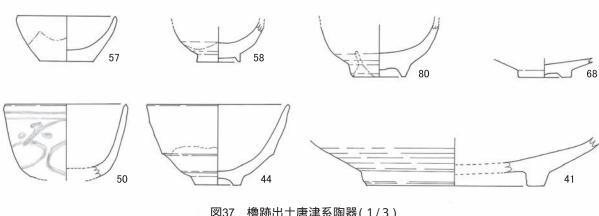


図36 櫓跡出土福建産陶磁器(1/3)



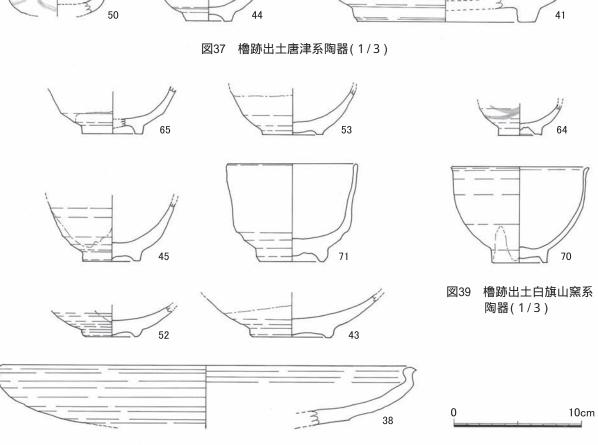
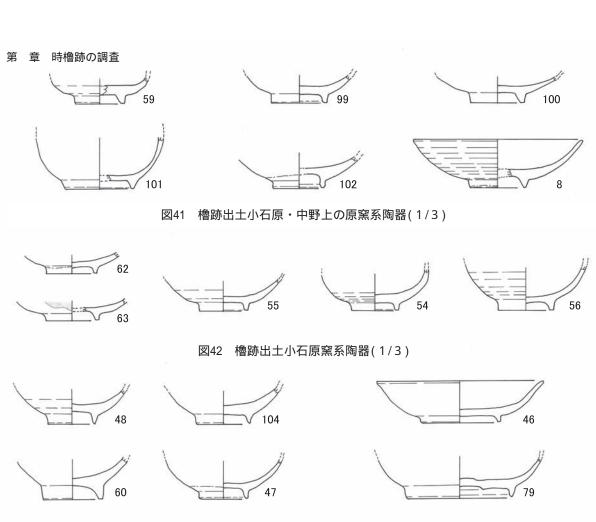


図38 櫓跡出土内ヶ磯窯系陶器(1/3)



図40 櫓跡出土陶磁器 1



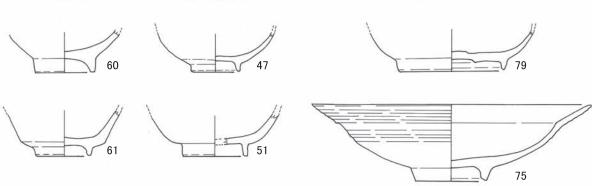
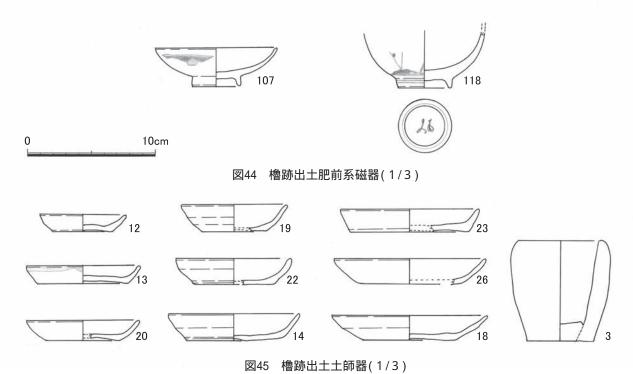


図43 櫓跡出土肥前系陶器(1/3)



18



図46 櫓跡出土陶磁器 2

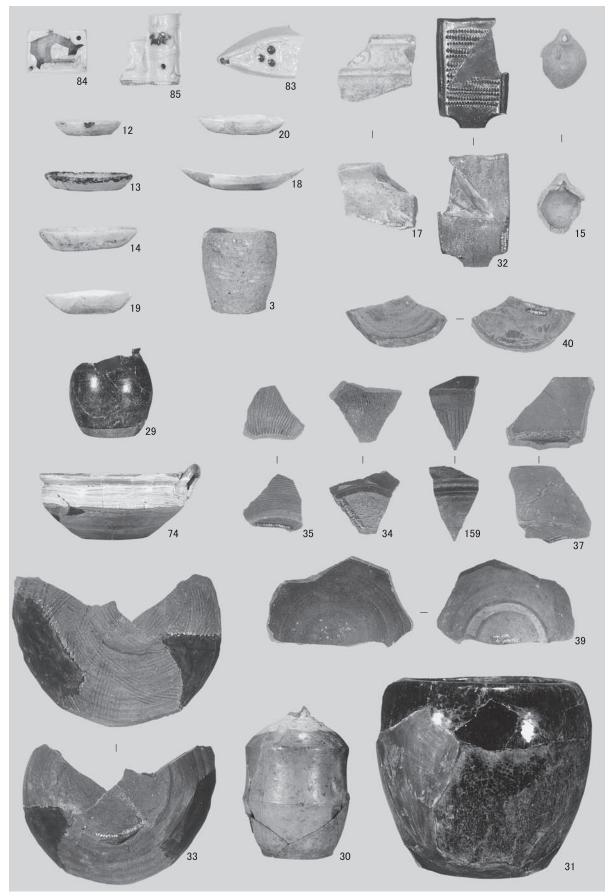


図47 櫓跡出土陶磁器 3



図48 櫓跡出土軒瓦印判拓影

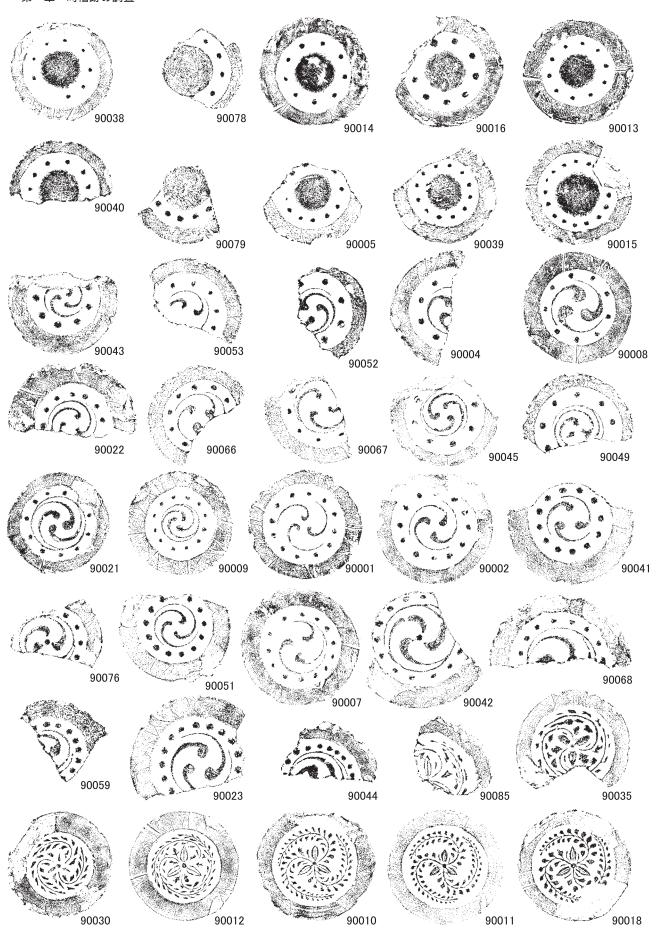


図49 櫓跡出土軒丸瓦拓影

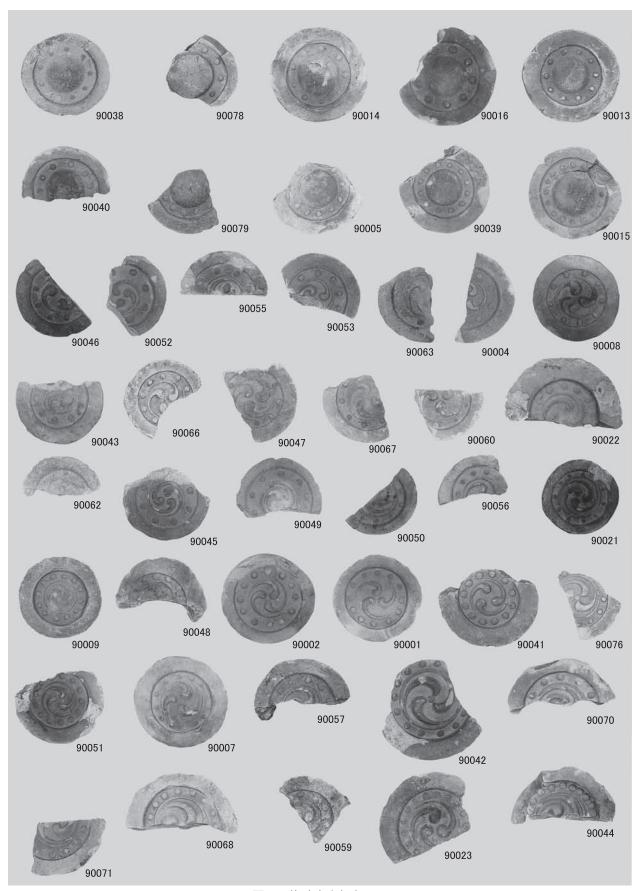
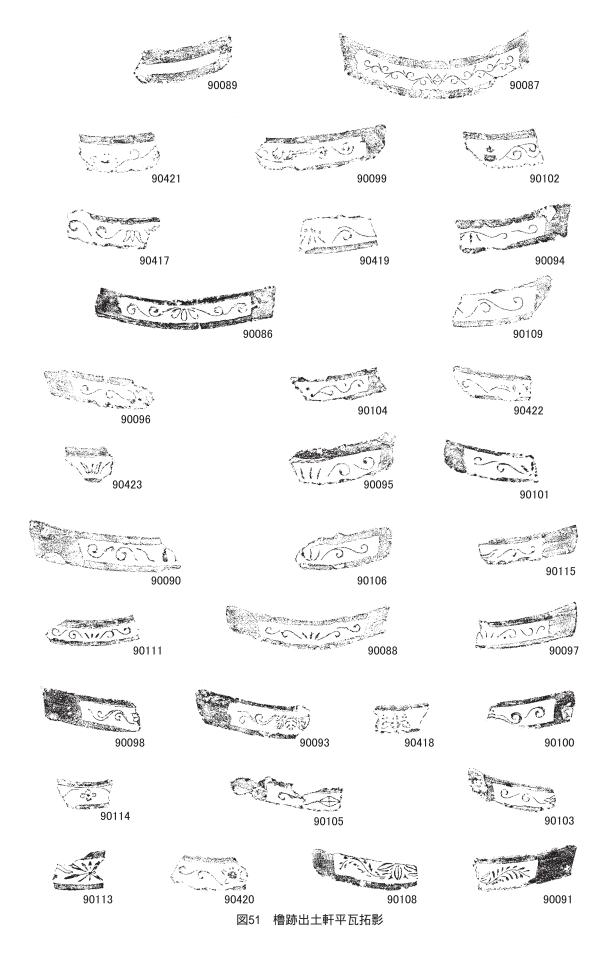


図50 櫓跡出土軒丸瓦1



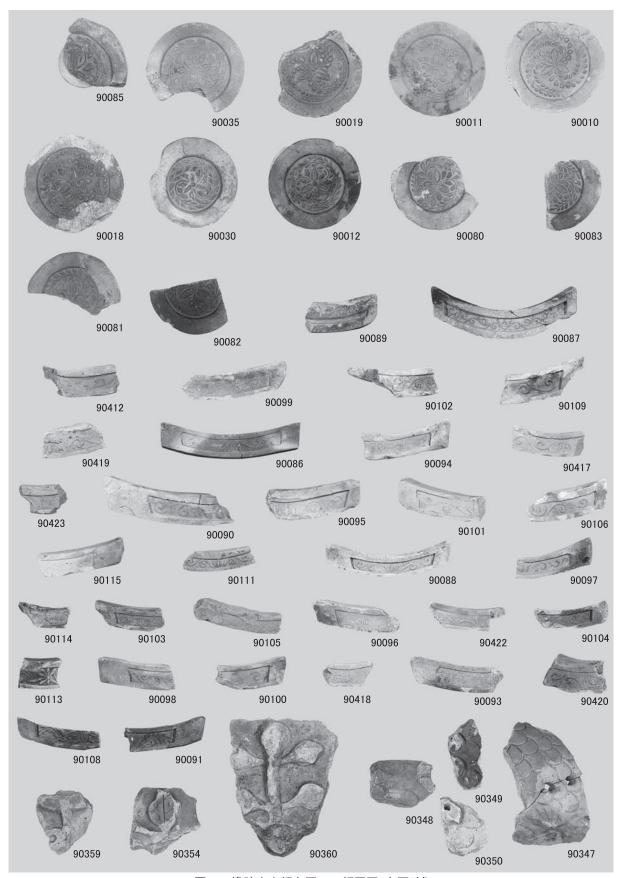


図52 櫓跡出土軒丸瓦1・軒平瓦·鬼瓦·鯱

7) 肥前系陶磁器 (図43・46)

79は青磁を模倣したと思えるような皿で、内面にはトチンの爪跡が残る。底部外面は蛇目高台状に 二段を呈し、施釉を削り取った上段面にはトチンの爪跡が残る。18世紀後半~19世紀初が多い。

8) 土師器 (図45・46)

小型から中型の土師皿が出土している。12・13は口縁端部に煤が付着していることから灯明皿と言える。3は小型壷状を呈する。

9) 瓦(図48~52)

瓦は軒丸瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、鬼瓦、鯱、桟瓦が出土している。

10) 銭貨

銭は開元通宝、文久永宝、寛永通宝の銅銭3種10点と五銭硬貨1点が出土している。

3. 小 結

本稿は、これまでの調査成果を踏まえた上で本調査地を含む周辺の歴史的環境復元を行い、今後の本格的城郭復元整備における検討課題を探るものである。

1. 建物規模

櫓跡の敷地は建物廃絶後の旧軍隊・公園などの土地利用によって開削され、創建時から廃絶時の姿を知ることができない。このような中で、今回検出した礎石列について検討を重ねてみたい。

礎石列が敷地を南北に区切るように配される状況は、城絵図に櫓建物が北に張り出した方形の敷地の北側半分に立地して描かれた状況と合致し、櫓建物規模を示すものと判断して問題ない。礎石が二段状に残存している点については、いくつか想定されよう。まず、下段の石列については最初に築造された建物に付随するものと思われる。しかしながら、その後の造成地中央部を中心とした地盤沈下により改修を必要としたことは、上段石列の中で上面高が下段列と近い数値を示していることから明らかである。この際の地盤沈下の原因は、特に沈下度の高い中央部の造成が盛り土であったことから、造成工法に問題があったものと考える。上段列については、沈下への対応と別建物の建築が考えられる。建物構造については今回の調査で明らかにすることはできなかったが、二層建物を支えるだけの基礎が認められることから、絵図の示すように二層建てとしたい。

今回の調査では期間的制約により、時櫓跡櫓跡について十分な情報を得たとはいえない。建物を復するに当たっても建物が存在しない現状下においては、基礎構造の詳細な情報を得る重要度が高まることから再度の発掘調査が求められよう。

遺跡整備の観点から今回の調査で改めて明らかになった点がある。石垣などの構造物周辺に根が張る植物、桜などを代表とする植栽は構造物に対して極めて悪い影響を与えていることである。一時的景観整備が実は土中においては遺跡破壊の種を蒔いているという事実を啓発する必要がある。

注1 出土建物分類については直方市教育委員会の田村悟氏にご教示をいただいた。記して感謝します。

第 章 潮見櫓跡の調査

1.調査の概要

(1)調査地点の位置

潮見櫓は、城内に47あったとされる櫓の内で城下町に最も近接して建つ櫓である。福岡城三の丸北西角部に位置し、唐津街道から城下への西入りの黒門と、大堀からの敵をにらむ地点に相当しており、本櫓の機能を考える上でこの立地条件は重要な要素である。なお、櫓跡中央の標高は7~7.3 mを測り、堀水面との比高差は約4~4.5mである。

(2) 現 状

平成6年度までは、国立福岡病院の敷地内駐車場 (未舗装)として利用されていたため、非常に硬く締まっている一方、櫓跡中央から南東部にかけては表土が流失し、石垣の裏込めやかろうじて残った礎石が露出していた。また、櫓跡を北西から南東に横断してガス管が埋設されているなど、総じて遺構の保存は良くない状況であった。

なお、櫓跡は、平成7・8年度に国庫補助を受けて600㎡について用地取得している。



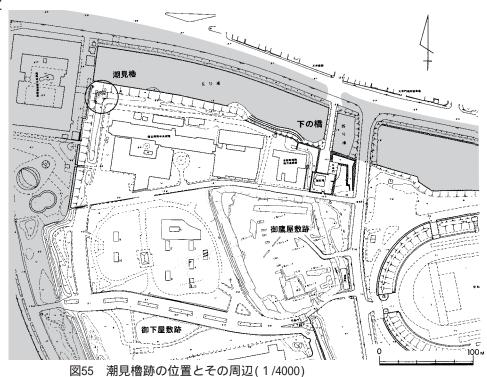
図53 潮見櫓跡現状(北東から 平成5年当時)



図54 西面石垣検出状況(西から)

(3)調査区の設定

平成9年度には 潮見櫓の基壇規模 の推定を主たる目 的として、5年度



27

のトレンチを拡張し、入角部分の石垣も含めて、 櫓跡全体を対象に約 300㎡について調査を行った。

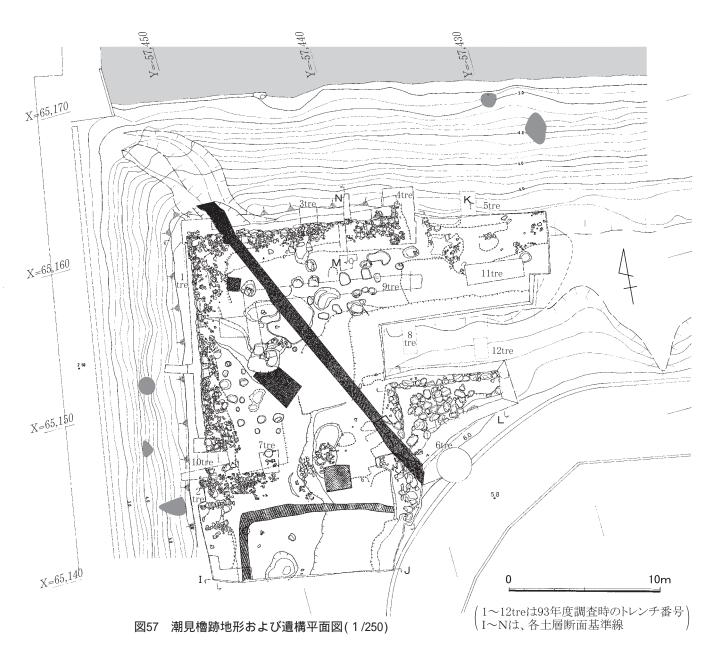
2. 遺構と遺物

(1) 土 層

潮見櫓跡を含む三の丸北西部は、平成6年度の三の丸の調査(福岡城跡第28次)で、低湿地上に2~3mほどの厚さの風化頁岩を多く含む盛土によって造成されていることがわかった。造成時期は福岡城築城の時期で、その範囲は舞鶴中学校から北西部土塁までの約50,000㎡以上にわたる広大なものと推定される。この整地土層上に、第三紀



図56 櫓跡全景(南東から)



風化頁岩を多く含む明褐色~黄褐色砂質土をさらに2mほど盛り、断面台形状(基底部幅約10m上辺部約5m)の土塁を造成している。櫓部分では、ほぼ同質の盛り土、頁岩を裏込に用いながら石垣を構築している。

(2)遺構

石垣、礎石、礎石据付穴が確認できた。総じて 遺構の遺存状況は良くない。礎石などの石材は櫓 本体の払い下げ時に合わせてもらい受け、移築先 の崇福寺へ搬出しているため、残りはわずかである。

1) 石 垣

石垣は、堀に面した北面と西面、ならびに城内部に面した入り角の南面と東面の2面を確認できた。

北面と西面の石垣は、先述した第三紀風化頁岩を多量に含む整地面 (明褐色~黄褐色砂質土 標高5~5.5m) から一抱え大よりやや大きめの花崗岩、玄武岩や砂岩を、約75~80°の角度で積み上げている。石垣法面は北面の方が角度が強い。

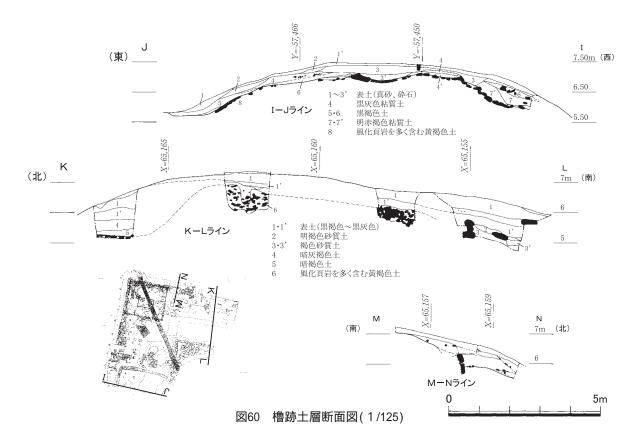
北面石垣は東西14.1mを確認した。北西角の石垣は三段で、 算木積み的に角をおさめているが、稚拙である。現存高は1.36 mである。全体的に石材の大きさや、形態が一定していないた



図58 櫓跡中央部全景(南から)



図59 西面石垣裏込め状況(東から)



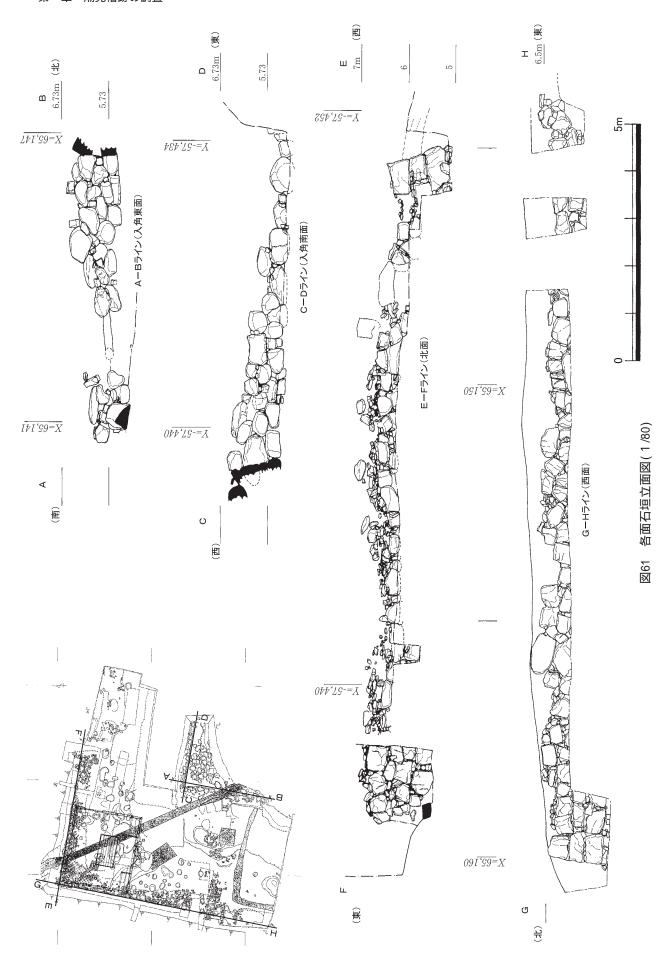




図62 北面石垣検出状況(北西から)

めに、目地は乱れている。特に石垣の中央部分は 大きさがまちまちで、統一感がなく、積み方も乱 雑である。東端部は、やや大きめの石材を用いて 構築し、北東角部の土留めとしている。4段分ほ どの高さで残っている。なお、石垣の基底面では すり付け面の土留石積みを1段確認した。

西面石垣は南北16.2mを確認した。北面と同様中央部の石の積み方は石材の大きさや、形態が一定していないために目地が通らず、乱れているが、北面と比べると石材がやや大きい。南端部は、北面東端部と同様に、土留め的な石積みがなされている。4段分ほどの石材が残っている。

北面と西面の石垣は、櫓跡に残る礎石の上面と 現存石垣上面との比高差から考えると、少なくと も 1 mから 1.5m分ほどの高さの石垣部分が欠失 していると考えられる。両面ともに、高さが35~ 45cm ほどの一抱え大の石を用いているので、少 なくとも 3 段~ 4 段分の石垣が消失していると考 えられよう。したがって、堀に面した北面および 西面石垣は、基底面から 6 段~ 8 段程度の石積み で、高さは2.5~3.2mほどの規模であったと推定 される。

櫓跡の南東側(城内側)でも、石垣が検出された。入り角をなしているコーナー部分に相当する 箇所で、人頭大から一抱え大の丸みのある自然礫 を無造作に積み上げた土留め用と思われる石垣で ある。石材は玄武岩を用いている。

石垣は、北面と西面の基底面よりも、50cm ほ



図63 西面石垣検出状況(北から)



図64 北西角部石垣構築状況(北西から)



図65 入角南面石垣検出状況(南から)



図66 入角東面石垣検出状況(東から)



図67 西面石垣検出状況(南から)



図68 西面石垣南端部検出状況(南から)



図69 西面石垣南端部検出状況(西から)



図70 北面石垣検出状況(東から)



図71 北面石垣東端部検出状況(東から)



図72 北面石垣東端部検出状況(北から)

ど高い面 (標高5.5m) から積み始め、一番残りの良いコーナー部分で3段分、高さ約1.2mを測る。石材はいずれも引きが浅く、ツラが合っておらず、横目地も乱れており、土留め用として応急的に乱積みされたものと思われ、櫓がなくなった後の土塁の改修、又は補修によるものとも考えられ、本来の土塁の幅より広くなっている可能性がある。

コーナー部分には石垣に用いられている石材と同程度の大きさと形状の石材が多数出土している。 櫓解体時に石垣の各上部から引き落とされたものと思われる。石材の間からは、明治期~昭和期の遺物 (古銭やボタンなど) が出土していることから、櫓跡部分およびその周辺の整地は、明治末期の払い下げ時、城内演習場となる昭和初期以降戦前まで、旧厚生省所管国立病院建築時の3時期に大きく分けられる。

なお、城内側コーナー部分の本来の旧地表面は、現在よりも約1 m低い、標高約4.8m前後の面であり、城内から見る櫓および土塁のかつての景観は現在よりも若干高く、異なっていたと思われる。

以上の石垣で区画された範囲が櫓台と考えられるが、その平面形は鉤形をなし「L」形である。櫓は北西出角石垣に本体の北西角部が合致するように建てられていたと考えられるが、この範囲に、明治期の払い下げ申請時に作成された平面略図(図79)に見られるような東側面と南側面に付櫓を伴った構造の建物がおさまっていたと思われる。

櫓台と土塁との接している部分は、削平を受けているため確認できていない。北面東端部と西面南端部での石垣の

あり方から見ると、石垣面に土塁をすり付けて収めていると思われるが、土塁と櫓台、あるいは土塁と付櫓と接し方の復元については、 慎重な検討を要する。

2) 礎石および礎石据付け穴 櫓台には、櫓の礎石と考えられ る石(図76 ・・・・・ ~ など)が残っている。いずれ も平板な板石で、玄武岩が主であ る。二次的な加工が見られるもの () があるが、他はいずれも自 然石のままである。大きさは、長 軸が 0.3m前後の小ぶりな ~



図73 櫓跡中央部礎石遺存状況 (9トレンチ 東から)



図74 櫓跡中央部礎石遺存状況 (9トレンチ 南から)



図75 櫓跡中央部礎石遺存状況 (東から)

第 章 潮見櫓跡の調査

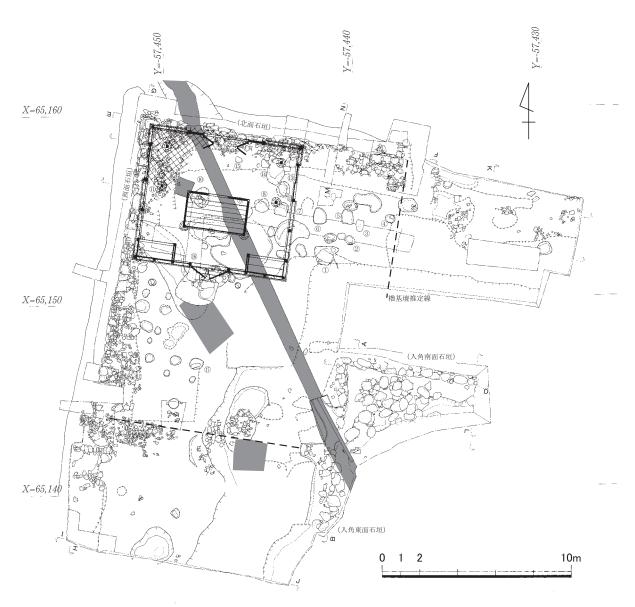


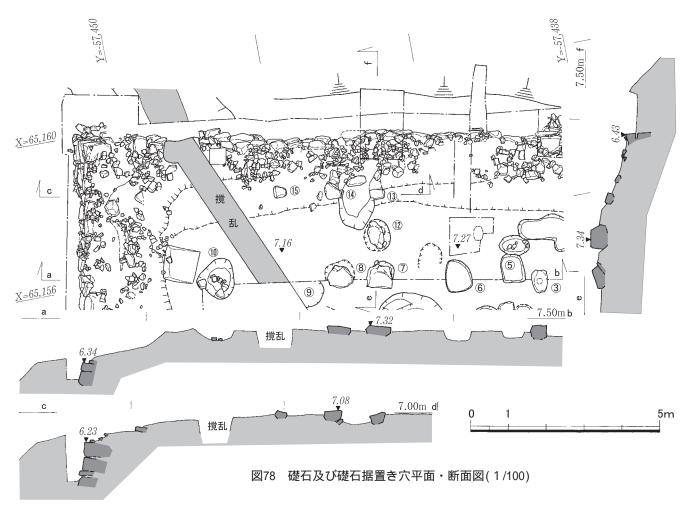
図76 櫓跡遺構平面図(1/200)

以外は、長軸が0.6~1.1m、短軸0.3~0.8mほどのもので、厚さは0.3~0.4mを測る。礎石・・・の上面は、標高7.2~7.3mほどを測り、ほぼ一定した値であるが、~ はこれらより約30cm ほど低い。

これらの礎石のうち、本来の原位置を比較的良好に保っているのは、とのみで他の礎石は平面的、垂直的にかなり動いており、建物の基礎平面を検討する上では注意を要する。



図77 礎石遺存状況(近接 東から)



また、礎石の据付け用と思われる穴がある(図78)。平面形は不定形で、長軸0.80m、短軸0.62m、深さ0.34mを測る。礎石の安定を図るための数個の小礫がみられた。

(3)遺物

出土した遺物は、近世~近代の陶磁器類、瓦類、獣骨片、貝、鉄製品(釘、不明金具)銅銭がある。 陶磁器類は一部の中国産陶磁器を除けば、肥前系染付、唐津系陶器、高取系陶器などで、器種は碗・皿・壷・火鉢・擂鉢など日常什器が主であるがいずれも小片である。2次の調査でパンケース約6箱分ほど出土している。

出土量が最も多かったのは瓦類である。軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、桟瓦、道具瓦 (熨斗瓦・隅平・隅丸)、鬼瓦などが出土している。総量でパンケース87箱分が出土している。

軒丸瓦は、文様の違いから三巴文 (1~19)、藤巴文 (20~37) に大きく分けられる。三巴文のうち名島城由来のものと思われる1~8以外は江戸時代後期~幕末までのもので、巴の形状と尾、珠文の形状から大きく8類に分けられる。黒田家家紋である黒餅文のもの8もある。藤巴文のものは、中心飾の花芯と蔓および花房の形状や数から大きく6類に分けられる。黒田如水隠棲の地といわれる御高屋敷から出土する古式のもの20~23から幕末期のもの36・37までの形式がそろっている。これらの軒丸瓦は、瓦当直径が17~18cmと、14~15cmのものに分かれる。

軒平瓦 (38~56) は、中心飾と唐草文の違いから17種ほどに分けられる。中心飾は宝珠、三葉、菊文、梅、藤三葉などがあり、藤唐草文は大きく6類に分けられる。

丸瓦は、軒丸瓦と同じく丸瓦中央部断面径が15~16cm のものと、13~14cm のものに分けられが、

65・66・67は隅平、隅丸瓦である。70は烏帽子で、外面にヘラ先で「寛政十一 (1799) 年未ノ六月」

の銘がある。72~73は鬼瓦で、73は黒田家家紋の 一つである橘文である。

瓦の印判は記号・数値のもの75~88、屋号もしくは人名で草書又は行書によるもの89~104・111と、楷書によるもの105~110がある。

3. 小 結

以上の調査所見および成果についてここでは簡単にまとめておく。

潮見櫓跡の敷地は明治41年に崇福寺仏殿として花見櫓とともに払い下げられた後、旧軍隊や国立病院駐車場・公園などの土地利用によって一部損壊を受けている。二回にわたる櫓跡の発掘調査では、東西に14.1m、南北に16.2mの石垣が確認されたが、櫓払い下げ後の新しい時期のものと思われる。

遺存している礎石、礎石据付け穴の平面および 断面の関係は、図78のようになる。各礎石と礎石 据え付け穴は直線的に見かけ上はならんでいる。 また、それらの間隔および配置関係については、 0.9~1.2mの方眼上ではならぶものの、正確な柱 間を推定することは現状では困難である。部材調 査による推定作業が合わせて必要かと思われる。

図76には、指定現状規模での櫓台における櫓の 平面配置を示した。櫓台の大きさに比べて規模が 小さい印象があるが、明治期払い下げ申請時の平 面略図 (図80) には、本体外周に半間ほどの幅の 外周部分、または庇の出部分、あるいは石垣幅と 見られる表現があり、本体の西側線に沿って「四 間」と注記がみられる。したがって、現状の潮見 櫓平面が梁行3間半、桁行(棟筋)4間であるこ とから、若干の改変を受けたとみなしても、櫓本 体については、確認された櫓台の範囲にほぼ現状 の規模でおさまると思われるが、付櫓の規模と合 わせて慎重に推定復元する必要があると考えられ る。

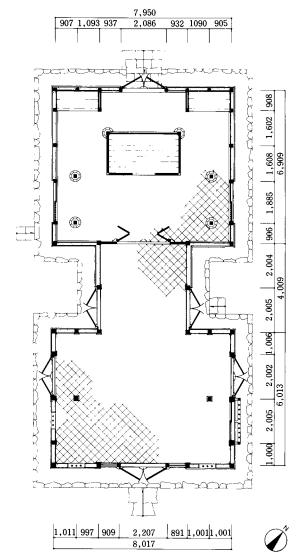


図79 県指定「崇福寺仏殿」現状平面実測図

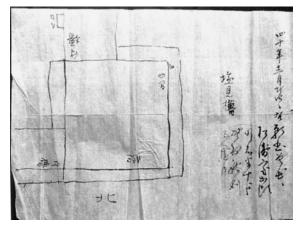


図80 潮見櫓平面略図

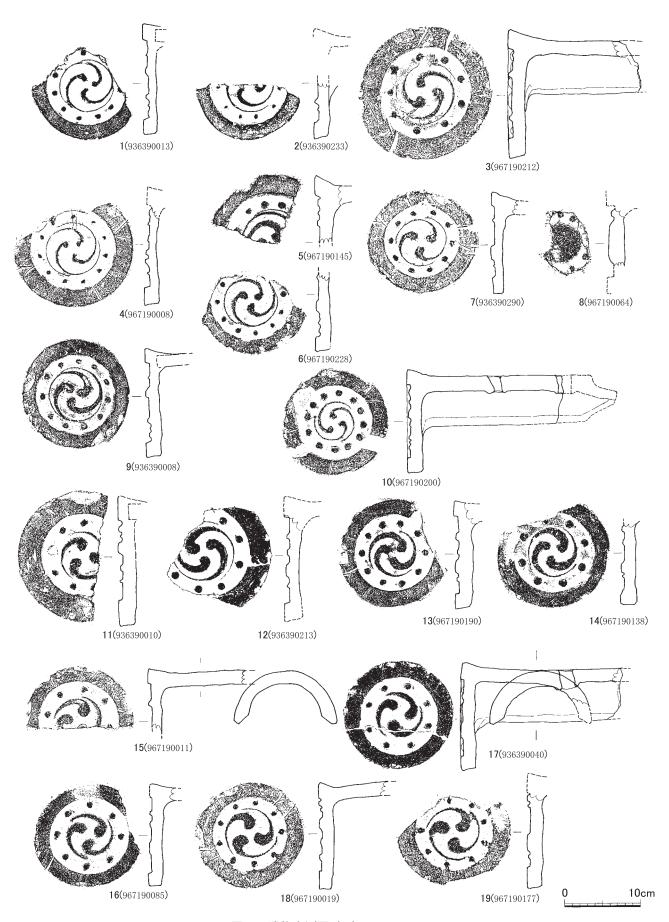
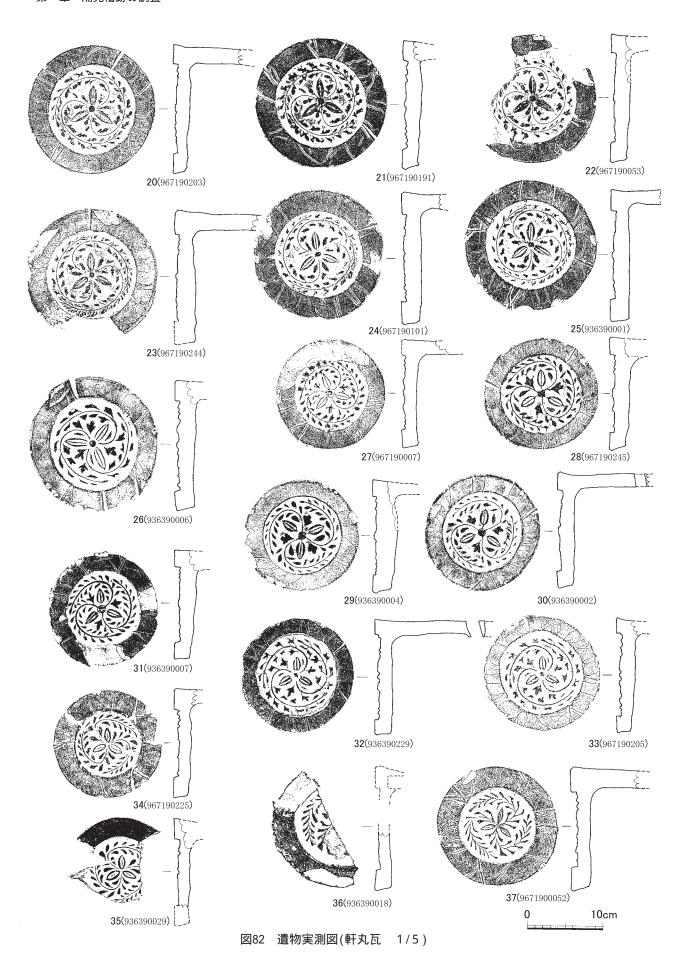


図81 遺物実測図(軒丸瓦 1/5)



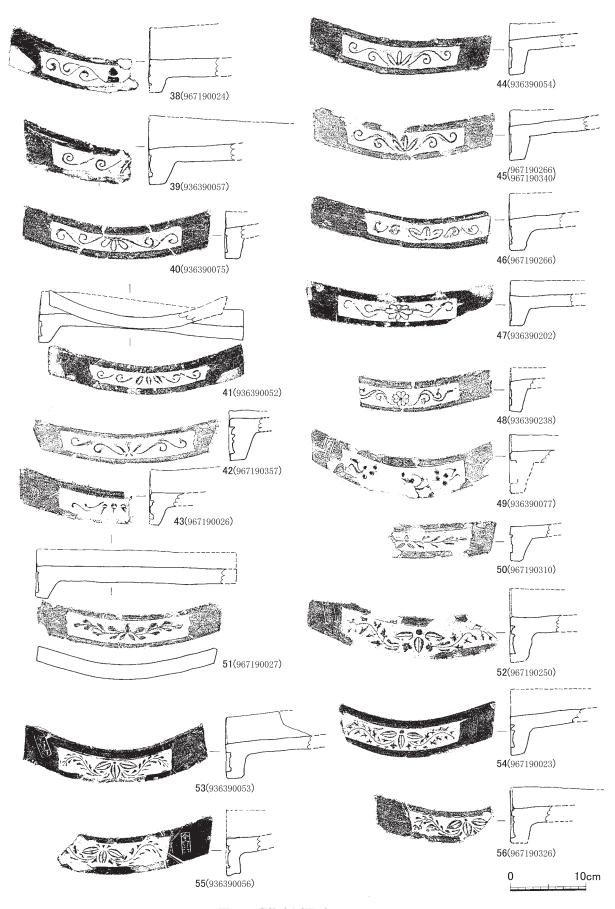


図83 遺物実測図(軒平瓦 1/5)

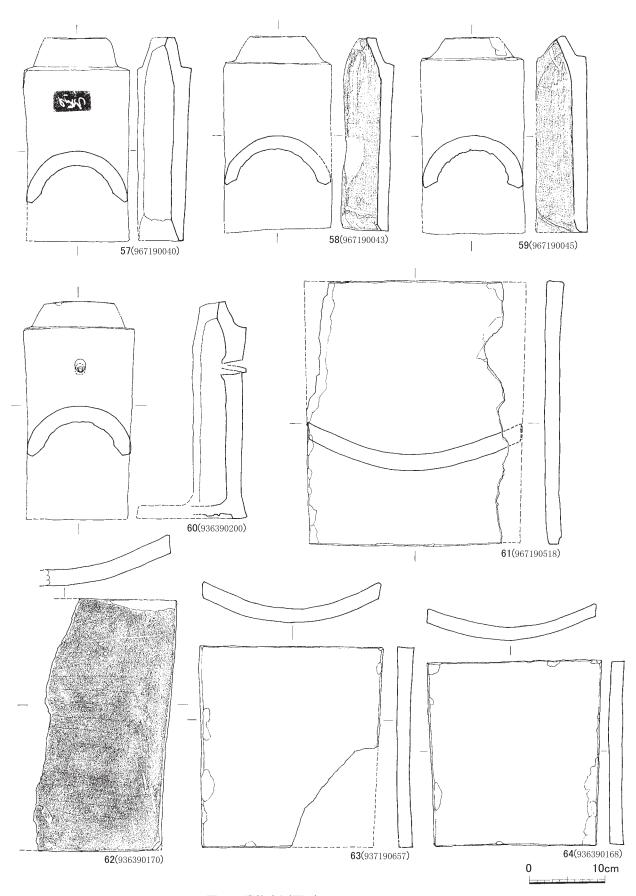


図84 遺物実測図(丸瓦・平瓦 1/5)

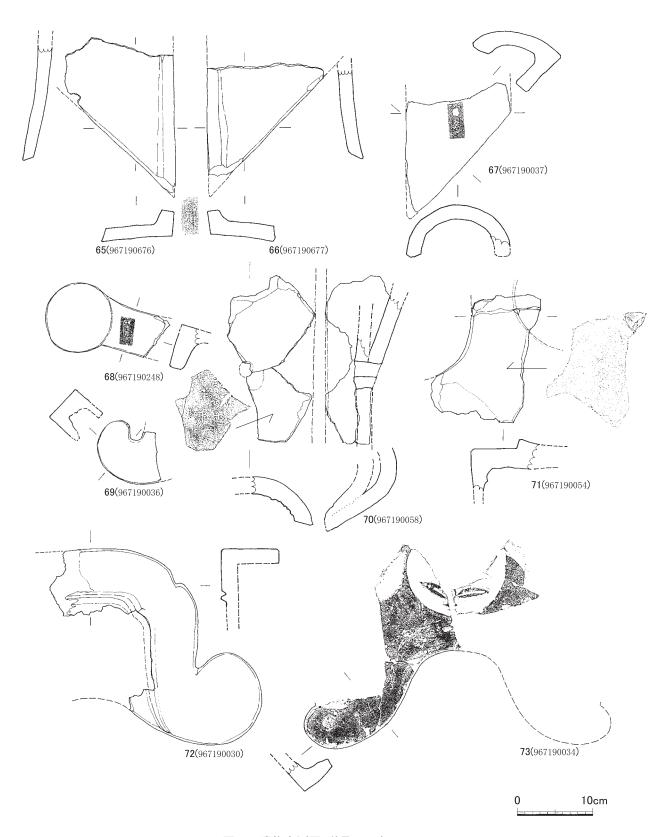
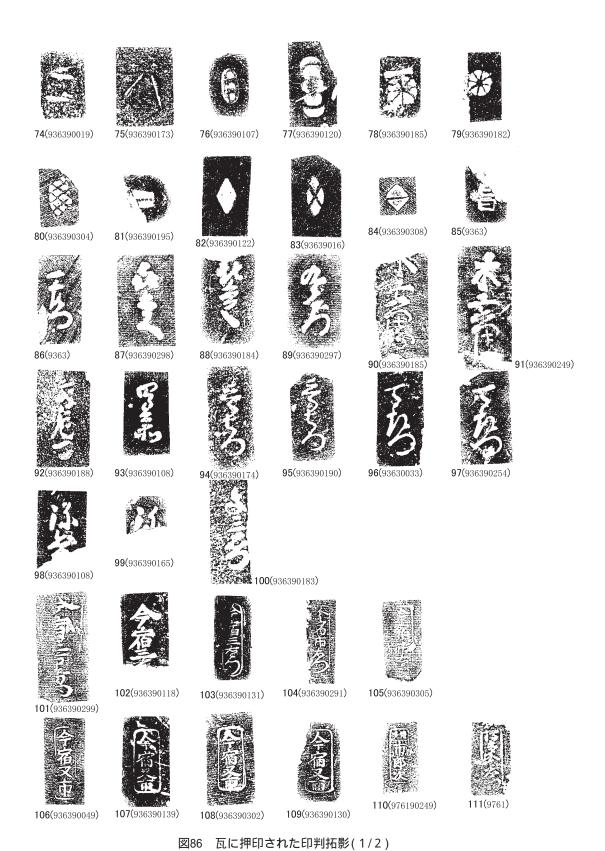


図85 遺物実測図(道具瓦・鬼瓦 1/5)



報告書抄録

ふりがな	ふくおかじょうあと									
書 名	福岡城跡									
副書名	潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告									
巻 次										
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第969集									
編著者名	田中壽夫・瀧本正志									
編集機関	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課									
所 在 地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号									
発行年月日	2007年 3 月30日 (平成19年 3 月30日)									
所収遺跡名	所在地		コ ー ド 市町村 遺跡番号		岩北	緯	東 経	調査期間	調査 面積(㎡)	調査原因
福 岡 城 跡 第18次	福岡市中央区城内		4013	32 0193	33 %	35 7	130 °22 57	1992,3,1 ~ 1992,3,31	278	史跡整備
遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構			主な遺物		特記事項	
時 櫓 跡	城郭 遺構	江戸時代		櫓跡 石垣・礎 ²	石・階段	肥前系・高取系陶磁報 近世瓦 (平・丸・軒 道具・鬼瓦など)			櫓跡整備に係る 確認調査	
所収遺跡名	所在地 寸		市町	」 ー ド 村 遺跡番	岩北	緯	東 経	調査期間	調査 面積(㎡)	調査 原因
福 岡 城 跡 第25次 第38次	福岡市中央区城内		4013	32 0193	33 %	5 21	130 °22 43	1994,3,1 ~ 1992,3,28 1997,2,20 ~ 1997,3,18	65 300	史跡整備
遺跡名	種別	重 別 主な時代		主な遺構			主な遺物		特記事項	
潮見櫓跡	城郭 江戸時代 遺構		t 1	櫓跡 石垣・礎 ² 据置き穴2		幕末~近代陶磁器 近世瓦 (平・丸・軒平・軒丸・ 道具・鬼瓦など)			現存する櫓の復元 および櫓跡整備に 係る確認調査	

福岡城跡

潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第969集

平成19(2007)年3月30日

発行者 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 大同印刷株式会社

福岡市中央区今泉1丁目13番30号